

招待記念講演「対人援助学」創生のために

木村 政雄

(フリープロデューサー)

本当に時代も変わったなという気がするわけではありますが、時代が変わったということと言えますと、昨今のこの日本、我が国をおおっているムードも随分とかわってきたと思います。悪い方へ時代が非常にグロームになっております。世界第2の経済大国と言われても、国民の幸せ度、世界90位。うつ病もふえております、児童虐待、凶悪犯罪、経済を理由にした自殺者もふえております。依然暗い重苦しい気分が漂ったものであるというのが、今、我々が置かれている状況なんじゃないかなと思います。ある人はこの状況をさして、まさに混迷の時代であるとか、あるいは常識人にとって非常にわかりにくい世の中になってきたみたいなおっしゃるわけですが、では、常識人にとって、今の時代がどうしてわかりにくいのかというと、多分それは常識人たる人たちが持っている常識なるものが、激変していく時代のフレームに合わなくなってきたということなんじゃないかなと思うわけです。常識というのは、過去から昨日までの一番支配的な考え方にしかすぎないのです。ある種、期間限定つき、賞味期限つきの価値観にしかすぎないんです。それを普遍のものとして激変していく今の時代に当てはめようとしても、それは通らなくなったということなんじゃないかなと思います。新しい問題を解くためには、やはり新しい方程式を立てなきゃ解けないということでありまして、もう我々の今までの考え方の前定、いわゆる常識なるものをいったん捨ててしまって、新しい考え方の枠組みを構築していかないと、激変していくこれからの時代に対応できないときに差ししかかっているのじゃないかなと思います。

人間というのは、生まれてから10代の後半、あるいは20代半ば過ぎまで、大体みんな背が伸びていくんです。そうやって20代半ばを過ぎますと、身長伸びはストップするのだけれども、いろんな経験をしたり、いろんな知識

を吸収して、人格的に発展していくというふうには変わると言われております。背が伸びていくというのは、別の言葉で言いますと、量的に拡大する、つまりグロウス。人格的に発展するというのは質的发展、エボリューション。こういうふうには変わると言われております。日本という国は、明治の最初のころも第二次対戦以降もそうなんですけれども、早急にヨーロッパとかアメリカのような先進国に追いつき追い越すために、価値とか仕組み、資本とか人口、こういうものを東京、中央1カ所に集約させまして、集団エネルギーとガンバリズムで一生懸命頑張ってきた国なんです。そうやってハイパフォーマンスというものを実現させまして、さて自らが世界のフロントランナー、先頭に立った途端にあるべき姿を見失ってしまって、心理的にたたずんでいるというのが今我々が置かれてる状況なんじゃないかなと思います。

右肩上がりのパラダイムという目的を見失ってしまって、国も個人も、自分たちの居場所がわからなくなって、あてもなくさまよっている、ある人はこの状況を指して、まさに主体性拡散の時代である、アイデンティティー・ディフュージョンの時代であるとおっしゃっておりますが、まさにそういう状況に我々は今置かれているのではないかなという気がします。

今までは、すべて目標とするものが明白であって、それに向かって一致団結して頑張っていればそれでよかったんです。そうやって頑張ってきたおかげで、日本の国民総生産は1946年に4,700億円しかなかったものが、2006年には約約1,000倍以上の515兆円になったんです。国民総生産が1,000倍になって、我々が1,000倍豊かになったのかというと、決してそんなことはなく、オランダ出身のジャーナリストで、カレル・ヴァン・ウォルフレンという人が書いてベストセラーになった本のタイトルのように、「人間を幸福にしない日本というシステム」というふうに揶揄されています。幸せになるために頑張った、でも頑張った分だけ幸せになれていないというのが、今我々が置かれてる状況じゃないかなと思います。昔、日本人が高度成長の夢に酔いしれてるときに、ある外国人が言ったそうです。君たちは高度成長の達成に成功したのはわかった、でも、君たちは高度成長を達成した後、一体何をするつもりなのかと問いかけたそうですけれども、まさにその答えを用意しないま

ま我々はここに来てしまってるのではないかなと思います。本来人間は、自分たちがどういう生活をしようという目的があって、その目的を達成するための手段として労働や貯蓄をしたりするのですが、どうも我々は本来手段であるべき労働とか貯蓄それ自体を目的化してここまで来てしまったのではないかなと思います。何のための成長なのかというイマジネーションを欠いたままここまで来てしまったのではないかなという気がします。今こそ今までの意識、仕組みを変えるチャンスだと思います。

では、意識や仕組みをどう変えるのか。意識は、今まではひたすら成長することを軸にして社会を動かしてきたのですが、成長率の高さというのは必ずしも我々に幸せを保障し得ないということがわかってしまったのですから、これからはむしろ楽しさというものを軸にして社会を動かしていかなくてもはいけないのでしょうか。成長を追いかけるのではなく、本当の意味での自由というのを享受したほうが人が幸せになれるのではないかな。GDPやGNPよりGHP（国民の幸せ度）・GNS（国民の満足度）こういったことが幸福の尺度になっていかなくてはいけないというのがこれからの時代です。

仕組みということと言うと、今までは成果というものは東京中央1カ所に集約をいたしまして、上から下へ得られた成果を配分していくシステムだったと思います。これからは、そうではなく、みんなが力を合わせて成果そのものを一緒に作り出していくという構造に変えていかなくてはいけないと思います。もう我々は今までのゲームや競争のルールが変わってしまったことに気づいたほうがいいと思います。何にでも賞味期限というものがあります。物事というのはむしろ変わっていくことのほうが当たり前ののだという動体視力を持つ必要があります。人間にも賞味期限があります。頭の堅さ、創造性、クリエイティビティー、こういうものがなくなると、人は相手を否定することでしか自分の立場を示せない悲しい癖があると思います。「おれは聞いてない」「言ったじゃないですか」「正式には聞いとらん」「それはうちがやることではない」「前例がない」「社風になじまない」、こんなことばかり言っていると、あっという間に賞味期限切れになってしまいます。できるだけ肯定から物事に入っていくということが大事です。同様に、才能、

組織、常識にも賞味期限というものがあります。

では、どういうふうにゲームや競争のルールが変わってきたのかというと、今まで予想もしなかったライバル、見たこともない敵があらわれるという、異業種間の競争に移っていくというのが言えるのかもしれませんが。もう今までの物事のくくり方、カテゴリー価値、こういうものにほとんど意味がなくなってきました。一流と二流の区別、プロとアマチュアの区別、公、私の区別、表と裏の区別、文化系や理科系の区別等も随分変わってきたと思います。

我々は一体何を競ってきたのかというと、ひたすら「ほかよりうまくやる」ということを競ってきたのです。ところがこれからは、ほかとどれだけ異なるか、魅力的なことをやるかということを経営していく時代だと思います。オペレーションのエクセレンスよりも発想のエクセレンスのほうに価値があるということです。より以上に個性、主体性、独自性、オリジナリティー、固有の強み、こういうものを前に出していけないと生き残っていけないのです。

これをグローバル・パラドックスといいます。手段としてのグローバリズムが広がっていけばいくほど、軸足としてのアイデンティティーを求められる時代になっていく。今まではいかに獲得するか、haveを主体に物事を考えればよかったんですけども、これからはそうではなくて、いかにあるべきかという、Beを主体に物事を考えなきゃいけない時代が変わってきた。

こうした時代に求められた能力（アビリティ）というのは、業界や領域やカテゴリー、こういうものを乗り越えてアピールしていけないといけませんので、能力にも汎用性、広く通用するものが求められます。散髪屋さんで言いますと、今まではカットの技術だけ磨いていればよかった、これからはそれに加えて、ホスピタリティー、エンターテインメント性まで求められる時代になってきた。自分がしっかりしなきゃいけない、自己依存型、他人頼みの時代から自分頼みの時代に変わりつつあります。

情報の流れで言いますと、今までは上の命令を下へ一方的に伝達してあればそれでよかった、上意下達型、インフォメーション型。これからは双方向型、コミュニケーション型、インタラクション型に変わっていく。人は今まで受信機能だけを持っていればそれでよかった。これからは発信機能、語る

べき何かを持っていないと生き残っていけない。みずから考えない、みずから動けない、でも組織に対する忠誠心だけはいっぱいある、こういう人は今や組織にとってリスクでしかないのではないかなと思います。上司は部下の人格を管理するのではなくて、モチベーション、コミュニケーションのマネジメントを図って成果をコントロールしなくてはならない。マネジメント能力に加えてパフォーマンス能力を持たなければいけない。リーダーの役目はビジョンを語り、そのビジョンに向けて現状を近づけるマネジメントをすることだと思います。企業とか組織の場合、こういう個人のパーソナリティー、アイデンティティー、こういうものを支援してあげるべきだと思います。そうやって輝いた個人が逆に離れていかないだけの魅力を、組織なり企業なりがむしろ持たなくてはならない。

いい会社といいタレントというのは一緒なのです。縦軸と横軸で考えるとよくわかります。縦軸をリスペクト軸といいます、尊敬される。横軸はラブ軸、愛されるです。芸人さんの場合、縦軸は芸ということになるかもしれません。横軸は人気です。自分が頑張れば縦軸は伸ばしていけます。横軸を伸ばすのはそうはいかない。相手から見て、自らの存在を再確認しチャージにしないではいけません。学校も要はお客さんである学生さんにとってチャージかどうかということで選ばれる時代になってきたと思います。

今の20代の若者に、この国は一体何歳に見えますかというアンケート調査によると、60%の若者が50代、60代に見えると答えています。全国民の平均年齢は44歳です。44歳の人の外見が50や60歳に見えるのが日本の姿です。だったら、50代、60代がもっと輝いていかないと、国のイメージがたそがれるのではないかなと思います。昔と今と年代観もパラダイムシフトしてはいけません。もう今までの物事のくくり方というのを1回変えてみる、そういう時代になってきたのではかなという気がいたしております。この辺で一旦話を終えたいと思います。長時間、御清聴いただきまして、ありがとうございます。

オープン・リサーチ・センター整備事業「臨床人間科学の構築」
公開報告会と記念講演



「対人援助学」 創生のために

立命館大学における「対人援助（ヒューマンサービス）の科学」をテーマとした組織的研究は、1999年教育科学研究所（現、人間科学研究所：2000年設立）の小さなプロジェクト研究（ヒューマンサービス研究会）に始まり、2000年度から「ヒューマンサービス/対人援助科学研究会」と名を改め、さらにそれを一つの核として文部省（当時）学術フロンティア推進事業「対人援助のための人間環境デザイン研究」の採択を受け学部を超えた大きなプロジェクトとして発展するに至りました。2009年には、立命館大学を中心に「対人援助学会」をスタートさせます。

今回はオープン・リサーチ・センター整備事業の中間報告会として、様々な領域に渡り研究している本プロジェクトの各研究チームが成果を発表します。また、対人援助学と笑いの新たな結びつきを探るため、フリープロデューサーの木村政雄氏に（元、吉本興業株式会社常務取締役）ご講演頂きます。

2008年3月7日(金)
10:00～18:00（開場 9:30）

立命館大学衣笠キャンパス
創思館1F
カンファレンスルーム

会場までのアクセス：
http://www.ritsumei.jp/campusmap/pdf/kinugasa_map.pdf
駐車場スペースがございませんので、公共交通機関をご利用ください。

【主催】立命館大学人間科学研究所

参加無料／事前申込要（定員120名）

お名前・ご所属・ご連絡先（EメールかFAX）を明記の上、下記EメールかFAXにてお申込み下さい。定員に達し次第、受付を終了致します。
※ご記入頂きました個人情報は、本シンポジウムに際する事項以外には一切使用致しません。なお本情報につきましては、厳重に管理しシンポジウムが終了次第適切に処理します。

プログラム（敬称略）

① 公開報告会（9:30～16:00予定） 司会：サトウタツヤ（立命館大学文学部教授）

- ご挨拶 望月 昭（立命館大学人間科学研究所所長、文学部教授）
- オープン・リサーチ・センター整備事業「臨床人間科学の構築—対人援助のための人間環境研究」プロジェクト各チームの報告発表予定チーム
- エイブルサポート系 【教育臨床チーム、高齢者チーム、知的画像処理システムチーム、ディサビリティチーム】
- オルタナティブ系 【バリアフリーチーム、家族チーム、子どもチーム、自己決定QOLチーム】
- エンバロメント系 【CEHSOC（医療・福祉エンバロメント）チーム、コミュニティチーム、M&A（マインドフルネス&アクセプタンス）チーム、ユースサービスチーム、ベトナム障害児教育・福祉国際連携チーム】
- アドボカシー系 【臨床社会学チーム、研究法開発チーム、ダイバーシティ・マネジメントチーム】

※口頭発表と同時に、各チームのポスターセッションを行います。

② 記念講演（16:00～17:30予定） 司会：サトウタツヤ



招待記念
講演

「笑いが人を助ける ～対人援助学のすすめ～」

フリープロデューサー 木村 政雄

■お申し込み・お問い合わせ先

立命館大学人間科学研究所 事務局
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 TEL: 075-465-8358 FAX: 075-465-8245
E-mail: ningen@st.ritsumei.ac.jp URL: <http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/hs/hs/index.html>

本企画は、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「臨床人間科学の構築—対人援助のための人間環境研究」の研究成果として広く社会に発信するものです。